



放友会だより

<http://kanagawa-hoyukai.jp>

No.72

2023年7月1日発行

神奈川放友会

A kindness is never lost!

行事報告

◆ 令和5年度総会 ◆

4月16日(日) 参加者 41名



大岡地区センター大会議室で開催された総会では、各号議案が読み上げられ、質疑もなく粛々と進行されました。

2023年3月31日現在の会員数は105名となり、終了後の「のとやん」での懇親会には25名の参加がありました。6,364円の募金がありました。



◆ 春季例会 ◆

5月14日(日) 参加者 30名

春季例会は弘明寺講堂で、美松寛大副住職を講師として招き、写経を中心にワークショップ形式で行われました。まずは筆の持ち方を習い、薄くお経が印刷された用紙に筆ペン



を走らせます。約90分にわたる写経が終わると、般若心経に関する法話を頂きました。上大岡「七福」での懇親会には20名が参加しました。4,282円の募金がありました。



◆ 春の学外活動 ◆

6月14日(水) 参加者 32名

地下鉄国会議事堂前で地上に出るとたくさんの警察官が警備する中、国会議事堂に入り



ました。手荷物検査をして衆議院を見学、その後隣の憲政記念館で、野口幸彦館長の熱い説明を受けました。徒歩で国立劇場に移動して「十八番」で昼食を食べて



から歌舞伎鑑賞会『日本振袖始一八岐大蛇と素戔嗚尊一』を鑑賞しました。懇親会には13名が参加しました。



◆ 会内同好会ほか ◆

書に遊ぶ会(4/20:9名、5/18:7名、6/15:11名)、俳句同好会(さわやかネット句会 5/2:8名、あすなろ句会 4/20:10名、5/18:10名)、女性の会(5/16:5名、6/20:6名)、音楽部(4/13:4名、5/10:4名、6/1:4名)、テニスを楽しむ会(4/21:5名、5/26:6名、6/16:6名)、またこの指とまれ企画として予定された小網代チャリティーウォーキング(5/31)は雨天中止となりました。

これからの予定

7月2日(日) 三殿台勾玉作り体験教室

8月6日(日) 夏季例会

9月3日(日) フェスタ・ヨコハマ

9月6日(水)~7日(木) 一泊研修「上郷森の家」

※今後の状況等により、イベントは中止または計画、日程変更となる場合があります。詳細はホームページにてお知らせしていきます。

会員募集

神奈川放友会では皆さんの入会をお待ちしています。入会資格は放送大学の学生で、メールで連絡が取れること、詳しいことはホームページをご覧ください。

神奈川放友会理念

放送大学に向学という同じ志をもつ学生が集い、個人の学習に会員相互の交流を加え、さらに奉仕の気持ちで社会とつながる、豊かで実りある学生生活を共有することを目的とする。

神奈川放友会に関するお問い合わせ

メール: info@kanagawa-hoyukai.jp

電話: 090-3507-7540 (事務局 / 真野憲助)

発行人: 兼田隆史 編集人: 鶴田昭彦

写真: 中田節子

いざ鎌倉・奥のヨコ道—紫陽花の町、初夏の道

今年の紫陽花は咲くのが早くなり、6月取材のころには鎌倉はもう初夏です。どこもかしこも川喜多かしこも（邸あたりも）「紫陽花の町・初夏の道」になっていました。

そこで今回は北鎌倉を中心にヨコ道を歩きました。紫陽花がみごとな円覚寺、明月院など有名な寺もいれてみました。これらの寺の解説などは、ネットでも本でもたくさん検索できます。「放友会たより」でひとつひとつの史跡を説明していたら、ページも増え続け日が暮れてしまいます。今回は体験談として、茶飲み話のタネになりそうなところを中心にご紹介することといたします。

行程は、北鎌倉駅 — 白鷺池 — 円覚寺 — 明月院 — 亀ヶ谷坂 — 葉王院 — 岩船地藏堂 — 海蔵寺 — 浄光明寺 — 鎌倉駅 です。

北鎌倉駅から円覚寺への道

鎌倉駅の隣の横須賀線北鎌倉駅は、ホームも狭くこぢんまりとした小さなかわいい駅です。横須賀線は15両ある長い電車です。そのホームは改札口に向かう人人でもういっぱい。平日だったからでしょうか、おおかた女性軍、それも中年、そこにカメラをもったひとり歩きのおじさんおじいさんが少しばかり。おばさんとおばあさんの中間あたりの「おばあおばさん」たち元気元気、大声のおしゃべりがあちこちから聞こえます。

ホームから改札口への歩みの遅いこと、ってかノロノロノロい。出口から一番遠いところで降りたウサギは思わず♪もしもしカメよカメさんよ～世界のうちでお前ほど歩みののろいものはない どうしてそんなにのろいのか♪と歌いました（心で笑いながら）。通常1分もかからないところ、10分近くかかった気分です。やっと改札口がみえてきた、外へ出られる、と思いきや、カメの歩みがストップ。「どこへしまったPASMOがないぞ」で大きわざのみなさまがた。これご相伴して楽しくいっしょに笑わせていただきました(^o^)



考えてみれば自分だって列の一員、ひとごとじゃないですから。

外へ出ると、日々筋トレしているがごとき



人力車夫のお兄さまがたが、手持ちぶたさそうに円覚寺の前で待っています。すでに夏のランニング風衣装に。いまから running ってわけですね。

円覚寺

・円覚寺が切断されていた！

北鎌倉駅北口を線路沿いに歩くと、左手すぐに国史跡の円覚寺があります。門のあたりは木々が茂り大昔の寺を彷彿とさせられます。何の違和感もありません。



が、ぜひその門に入る前に後ろのヨコ道を振り向いてください。横須賀線の線路が走っています。池があります。橋もあります。池にかかる

石橋は偃松橋（えんしょうきょう）、その先は踏切。実はここも円覚寺境内だったのです。明治22年（1889）6月22日までは、まずは大船と横須賀間の横須賀線開通により、白鷺池（びやくろち）の半分は埋め立てられ、総門との間の円覚寺は分断されてしまったのです。ちなみにこの池の名の由来は、鶴岡八幡宮の神霊が白鷺となって道案内してここへ降り立ったということから名づけられたとのこと。

それを知って眺めてみると、横須賀線は巨額を使った国の緊急な軍事路線とはいえ、当時の開通にはかなりの強引さがあったのではないかと思われました。調べてみれば、まだ東海道線も全線開通していない時期です。そこから枝のごとくに伸びた横須賀線の建設と着工、明治政府の強烈な力を感じずにはいられません。

なお同じようなことが鎌倉のあちこちで見られます。幕末には下馬四つ角まで続いていた聖なる道であり儀式の道であった鎌倉八幡宮からの段葛の南端も同じこと。横須賀線の工事であとかたもなく破壊されすっかりなくなっています。現存するのは二の鳥居から三の鳥居まで整備されたおおよそ460mです。

・なぜ円覚寺は残ったのか

国史跡の円覚寺はともかく広い！ 500円払って入場すると「境内案内図」をもらえます。それで場所など確認するのがわかりやすいです。それにして

いざ鎌倉・奥のヨコ道—紫陽花の町、初夏の道

もなぜ円覚寺はいまも鎌倉五山第二位の大寺院として残ってこられたのでしょうか。

開基は文永・弘安の役で元軍と戦った戦没者を弔うため、八代執権北条時宗が仏光国師無学祖元を開山に迎えました。落慶供養は弘安五年（1282）12月18日に行われました。

元弘3年（1333）北条氏は滅亡しました。このときすでに北条氏の招きで円覚寺にいた夢窓疎石が、後醍醐天皇の帰依を受けていました。さらに足利尊氏や直義の外護を得たこともあり、寺の難局を逃れることができました。その後大火や幕末維新の混乱で寺領を失います。明治8年（1875）に初代官長の今北洪川と弟子の釈宗演の働きで、現在も鎌倉五山第二位の禅道場として残されています。

この祖元が偉いお坊さんだったというエピソードとして、祖国の宋にいたころ元軍が寺に押し入ったときに悠然として一偈（げ）を解き元軍を感じいらせたということが残されています。その話は夏目漱石の『吾輩は猫である』でも偈（げ）の一句として二か所で書かれているとのこと。子供のころは気が付かなかった・・・もういちど読んでみたくまりました。

・円覚寺といえば、国宝舍利殿と国宝梵鐘

国宝舍利殿の創建ははっきりとわかりませんが、当初の建物は永禄6年（1309）に焼失しています。いまの舍利殿は室町時代初期に再建されたものを大平寺から移したもので、鎌倉時代の禅宗の様式が残されています。中には明和2年（1765）に作られた厨子（舍利宮殿）があり仏牙舍利が安置されています。

・ああ、これが舍利殿だったのか

「立入禁止の正統院の中門の奥に舍利殿の屋根や軒をのぞむことができる」と案内本などにも書いてあります。子供のころ、鎌倉円覚寺への遠足のとき先生もこうおっしゃっていました。

遠足の時と同じように中門から覗いてみると、正面に茅葺屋根の建物が見えました。木々でおおわれ詳しく屋根や軒はのぞめません。何度もきているにもかかわらず、いまのいままで、これを舍利殿と思っていました。子供の時に「教科書の写真となんかどこかが違うような気がするけど…」というひっかかりがあったことを思い出しました。

立札の写真を見えます。ああ、やっぱり先生が言っていたこと違うじゃないの、何十年もたったいまごろわかりました。

右上の写真をごらんください。舍利殿は中門からはよく見えない、正面の建物の隣。屋根がそっくりかえっているところだけしか見えません。たしかに

間違いやすいかもしれませんが、って自分だけでしょうか。ほかにも思い違いをされている人はいないのかな。

・巨大な鐘・国宝梵鐘

洪鐘、洪水の洪をかってオオガネとよみます。その標識のところ

にある急な長い石段を見上げる・・・登ろうか、躊躇。まず編集長が一行に行きます。みるみる姿は消えます。見える石段が最後ではなく、曲がったところにまた長い急な石段があるのです。鐘をつくまでの道も大変きつところです。



見れば驚く、話の種になりそうな洪鐘。高さ 259.5cm、鎌倉一の巨大な洪鐘。どれだけ重いか想像もつかない洪鐘、それが鐘楼に吊り下げられているのだから。6本の柱は古くて太い。

永正10年（1513）に大風で倒壊した大慶寺の仏殿の柱を使っているそうです。いまでいえばまさにリユースですね。だからか、この柱は洪鐘にふさわしい太さなのでした。さすが国宝です。

铸造は铸物師の物部国光、あれ？物部氏という名前、お久しぶりです。この名を再び有名にしたのがこちらの物部氏という代々の名工だそうです。建長寺の大鐘は国光の祖父の重光作とのこと。この鐘の銘に正安3年（1301）とあり寄進したのは北条定時です。

鶴田編集長「こんなすごい大きさの鐘、どうやってあの高さまで持ち上げたんだろうね」。

中田執筆者「想像ですが、もしかしたら当時はこの石段などでなく山の坂道を、何かに乗せて綱をかけて、みんなで綱をぴっぱりつつ上まであげたのではないのでしょうか、昔に巨大な石などを運ぶ時の方法で」。こういうのを人海戦術というのでしょうかね。

明月院

円覚寺から線路に沿って 300m くらいのところ左に小さな川があり、そこにそって左に曲がりまっすぐいくと、明月院の門の前に出ます。本尊は聖観音、創立者は通説では上杉憲方とされています。現在は別名紫陽花寺として知られています。紫陽花が有名

いざ鎌倉・奥のヨコ道—紫陽花の町、初夏の道

ですが、春夏秋冬、花の寺でもあります。紅葉の季節も良いところです。枯山水庭園や丸窓、明月院やぐらも見どころです。特に本堂の紫陽殿にある「悟りの窓」、部屋の円窓から見る景色は絶景、そこからの眺めは丸い額縁に入った美しい絵のような四季、これも明月院の見どころです。

・紫陽花と人の波



写真でみれば人のいないすり減った石段の両側に美しいブルーの紫陽花が咲き乱れ・・・ところが実際に紫陽花の季節では、川に沿って明月院の門まで歩くところから人々、チケット売り場で行列行列、狭い境内の狭い道の両側はあじさいあじさいあじさい。

それも青ばかりの同じ紫陽花がそれはそれは見事、さすが紫陽花寺と思いました。

いろいろな国の言葉が聞こえます。祭りのような大変な混雑。列に入るともうそこから出られません。みなさん写真撮影しながらで、なかなか進めません。あじさいの時期はこうなのですね。もう人はみないで横を向いて紫陽花を堪能しながら庭園をめぐりました。

・なぜ青い紫陽花ばかり？

明月院の紫陽花は、みんな青です。ヒメアジサイという品種で、数千本という紫陽花の道、この青の美しさは明月院ブルーと呼ばれています。



紫陽花寺となったのは、第二次大戦後のことだといえますから、そう昔からのことでもなかったのですね。物資がない時代で、参道を直すのに材料など手に入りにくいことから、手入れがあまりいらぬ紫陽花を植えたのだとか。

・方丈内の「悟りの窓」



ぞろぞろと列についていくと、本堂の戸があいていて道から大きな円窓が見えます。そこからの景色は本堂うしろの庭園です。見ようにも長蛇の列、さら

に中国語の家族が最前列、ずっと並んでいたのでしょうね。たのしげに一人ずつ、次は二人で三人で、そして全員でとずっと撮影会です。もう来ないかもしれない美しい場所、気持ちはよくわかります・・・みなさん何も言わないでおとなしく待っています。

・あらあらもう出口

時間をかけて歩いたけれど、人の波から抜け出せず、鎌倉最大級のやぐら、鎌倉十井の釣瓶の井、明月院の内の寺ほか、行くこともできずでした。紫陽花や紅葉の時期でないときにまた来てみたいと思いました。

亀ヶ谷坂(かめがやつざか)

鎌倉七切通のひとつで扇が谷と山ノ内を結ぶ国史跡です。武蔵の国から鎌倉への道として重要なところでした。両側の崖の高いところがかつての道でした。いまの道は舗装されているとはいえ自転車で



上っていくのは大変なくらいかなりの急坂です。なにしろ海岸の亀が歩いてきて急坂でひっくりかえって帰っていった、そこからの亀返りの坂がなまって今の名前になったという言い伝えがあるくらいですから。頼朝が初めて鎌倉入りを果たしたのが、この亀ヶ谷切通だったということです。

薬王院

亀ヶ谷の切通を下りきりほっとしたところに薬王院がありました。徳川家とのご縁で三葉葵を寺紋としていましたが、享保5年(1720)伽藍が焼失。いまの本堂は享保12年(1727)に再建したものとわれ、昭和の大修理から、また平成13年(2001)さらに一新しました。寺宝も多く所蔵している寺です。



江戸時代の終わりから明治にかけてはこの寺もご多分にもれず、無住職となり荒廃の一途をたどります。復興は大正時代になってからでした。ちょっと変わった墓地が本堂の裏にあります。ロッカー式、あるいは骨壺を地面に直接うめる方式のものです。ほか墓石も新しくデザインも同じように似ていま

いざ鎌倉・奥のヨコ道—紫陽花の町、初夏の道

す。いまどきの墓場なんでしょうね。



岩船地藏堂

亀ヶ谷坂の道に戻り右に下っていくところは、鎌倉のなかでは鎌倉上の道と呼ばれていた武蔵大路です。ここは鶴岡八幡宮から化粧坂、そして武蔵へ、さらには信濃までの道でした。突き当りのT字路は亀谷の辻です。建長3年(1251)に鎌倉の商業区域とさだめた7か所のひとつでした。その当時は賑やかな商店並ぶ町屋の町だったのでしょ。



その右にあるのが岩船地藏堂です。いかにも新しい、と思っていれば平成13年(2001)に建て替えたのです。道端に唐突にあるように見えますが、ここは海蔵寺が境外堂として管理しているとのこと。頼朝の長女大姫を供養する地藏堂と伝えられています。

海蔵寺

海蔵寺へ行ってみました。この寺は鎌倉公方足利氏満の命により上杉氏定が開基となり、心昭空外が開山で、応永元年(1294)に建立と伝えられています。薬師堂は浄智寺より移築、本堂は関東大震災後に再建とされています。門前の右側に鎌倉十井の底抜の井、薬師堂裏には十六の井があります。いくつかの寺宝は国宝館に寄託されています。



こぢんまりとした寺ですが、一年中花が絶えません。いまは紫陽花、ハナシヨウブ、マツバギク、などもゆっくりと見ることができました。みなさん気が付

かないとのことですが、植木の間からは観音像が顔をのぞかせています。裏に回るとイワタバコやシダがある落ち着いた池があります。円覚寺や明月院の喧騒が嘘だったような、静かな別世界、いいお寺です。



浄光明寺

この場所は亀ヶ谷坂の切通も近いし、防衛上でも重要な位置にある寺でした。浄光明寺は建長3年(1252)に、六代執権北条長時を開祖、真阿を開山として創建されました。浄土宗だったのですが、のちに浄土宗だけでなく華嚴宗、真言宗、律宗の四宗兼学となりました。鎌倉幕府滅亡後も足利尊氏と直義の兄弟の帰依をうけています。室町時代にも鎌倉公方の祈願所として幕府の保護をもとに栄えていました。その後、幾多の盛衰をくりかえしながら今につながる寺となっています。

山門をくぐります。これは英勝寺の門の寄進を受けて、大正15年(1926)に移築したものです。この寺は見どころがとても多いのですが拝観日が限られています。



筆者が興味をもったのは2000年という現在、鎌倉市内の旧家から発見された「浄光明寺敷地絵図」。長い間所在不明だったものです。足利氏の重臣である上杉重能の花押も残されていますから、絵図の作成時期は鎌倉幕府滅亡の1333年から1335年までの間とされています。いまは浄光明寺に返還され、2005年に重要文化財に指定されました。現在は鎌倉国宝館に寄託してあります。

これは鎌倉幕府滅亡直後の足利尊氏による新政権のときに、浄光明寺の寺領の確認を求めするために作成されたと考えられる絵図です。これが重要文化財となったのは、当時の境内の範囲や建物などの様子がわかるほか、情報量の多い貴重な資料だからです。

「浄光明寺敷地絵図」について研究者による論文をいくつか読んでみました。たとえば『浄光明寺敷

いざ鎌倉・奥のヨコ道—紫陽花の町、初夏の道

『地絵図の世界』大三輪龍也、『土地の地主浄光明寺敷地絵図にみる中世鎌倉の寺院』秋山哲雄などです。いろいろなことが書いてありますが秋山氏の論では、鎌倉の寺院は、鎌倉幕府滅亡後には遠隔地の所領の維持が困難となり、収入が減少したはずですが、そうではなかったのです。所領からの収入が途絶えても、鎌倉公方に出仕する武士たちは屋敷の地を提供し、その対価として地子を得てそれなりに収入にしていたとのこと。これは単独で門前町や寺内という都市を構成する寺院とは異なる方法で、都市的な寺院の在り方といえるそうです。都市鎌倉における寺院は広い土地を貸して、それを借りたものはまた貸して、地子という借地料を徴収する地主でもあったとありました。これはいまでは当たり前のことですが、それがこの絵図の発見により鎌倉時代の終わりから行われていたことがわかりました。

奥のヨコ道、紫陽花の鎌倉

寺や山、個人宅や道端、鎌倉はあらゆるところ、紫陽花の町となっていました。



円覚寺の紫陽花、町でみかけたいろいろな色の紫陽花、個人宅には直径 20cm ありそうな巨大な紫陽花もありました。いろいろな色の紫

陽花を鎌倉のあちこちで見、小学校のころのリトマス試験紙の実験のイメージが強く浮かびました。ご存じ



でしょうが、紫陽花の色は土の酸性度によって決まるといわれています。アルミニウムと結合すると青くなるのですね。つまり酸性度が高いと青、アルカリ性だと桃色、明月院の土は酸性なものでした。

途中から同じ紫陽花の色が変わることもあるような・・・なぜ？ それは雨がもたらすのだそうです。土の成分が流れ出して変化するのだとか。

それでは、この頃見る白い紫陽花は？ もともと

色素がない品種で、何色にも染まらないのだそうです。そこで花言葉も「寛容」。ちなみに明月院の青は「冷淡」「無常」「高慢」だそうです。うっかりプレゼントもできませんね(笑)。色の違いは土壤によるとわかったいまでは、咲かせたい色にすることが可能なのだそうです。紫陽花のほかにも花菖蒲、萩、沙羅など鎌倉は花盛りです。

<編集後記>

編集長・鶴田昭彦

コロナ時代がいよいよ終わりを告げ、古都鎌倉には国内の観光客に加えインバウンドが戻ってきました。北鎌倉駅から初夏の明月院は大混雑で、ここ数年で一番の賑わいとなっていました。雨上がりの紫陽花は、湿り気の残る土と木造の建物に色を添え、侘びの世界を演出します。こんなに大勢の人が来ているのに、すべてを包み込んでしまう瑞々しい明月院境内の懐に感激せざるを得ませんでした。鎌倉散策シリーズも回を重ねてもまだまだ奥深く、どこも同じような風景の中にも、いつも新しい発見ができます。目まぐるしく変化する現代社会の中で、不変の時を感じるができるからなのでしょう。

編集部執筆者・中田節子

今年は季節が早めにきました。紫陽花もいつもより早い時期に盛りでした。鎌倉はほかの花もあり百花繚乱。有名どころのお寺は人でいっぱい、それほど有名でなくても心地よい神社やお寺がいろいろあるのが鎌倉です。人ごみの円覚寺と明月院は編集長と取材して、そのあとのヨコ道は、人もいなくてのんびりと。鎌倉には谷戸がたくさんあり、そこにそってお寺や神社があり、坂道や曲がりくねった道、どこに通じているのか地元の方でないとわからない道が多いのです。表通りでなく、そういうところを歩いての思いがけない発見は面白いものです。それもこれも鎌倉に住んでいらっしゃる中田の先輩にご案内いただいたからこそのことです、感謝いたします。

今回の特集、「いざ鎌倉・奥のヨコ道—紫陽花の町、初夏の道」はいかがだったでしょうか。放友会だより編集部では、ご感想、ご意見をお待ちしております。皆様からいただきました情報をもとに、より良い誌面づくりに役立てていきたいと思っております。今後の「放友会だより」にも大いにご期待ください。メールは、info@kanagawa-hoyukai.jp まで。お待ちしております。

散策コース

北鎌倉駅



- 1 白鷺池
- 2 円覚寺
- 3 明月院
- 4 亀ヶ谷坂
- 5 薬王院
- 6 岩船地蔵堂
- 7 海蔵寺
- 8 浄光明寺



鎌倉駅

